
婦人会報

立教185年 **5** 月 令和四年
2022年



天理教婦人会旭日支部

通卷515号

天理教
婦人会
第104回総会

R185.4.19

婦人会長様ご挨拶

(要旨)



この度の総会は、コロナ禍での開催のため、人数を制限しなければならず、会員の皆様には大変申し訳なく存じております。しかしやっと三年ぶりに皆様をお迎えして、ここおちばで開催できましたことは、大変ありがたいことでございます。本日ここには支部の代表の方が、日本国内はもとより海外からも参加して頂いております。大変な中をようこそおちばにお帰り下さいました。

には、お道の御用、婦人会活動の上に、支部、教区でできることに取り組んで頂いていることと存じます。誠に御苦労さまでございます。まだまだ終息の気配はなく、様々などころに影響が及んでいる、誠に大きなふしですが、気づけたこと、学んだことが多いのも事実でございます。この節が起こった二年前から、おちばでの行事に限らず、人を集めての行事は軒並み中止を余儀なくされました。現在も以前のようにはできない状況が続いております。これは、人を育てる上には深刻な問題だと、誰もが危惧しているところです。し

かし、そのことから感じさせて頂くのは、人を育てることは、行事に参加すること以上に、日々の努力こそが大切なのだということでございます。おちばの行事に参加すれば、ちばの理を頂いて、何かしら感じ取ってくれるだろうと、その行事の前には一生懸命心をかけ、声をかけて参加を促し、参加をしてくれたらそれで丹精しているつもりになっていなかったでしょうか。確かにおちばの行事に参加することは素晴らしい体験であり、得るものは大きいのです。しかしそれを親神様はあえて止めておられるように思うのでございます。

一日一日、育てる意識を持つて、心をかけ、声をかけることこそが丹精なのだということを、あらためて教えてくたさっているのではないでしょうか。

学校では学校教育、部活動、またお道の中の会活動など、様々な場面においてそれぞれ指導者がいてこともは育てて頂くのですが、何より一番大きな責任を担っているのは親でございます。人格形成における基本的な仕込み、躰は日々の親の役目、責任でございます。そして、親子共々、信仰的な成人をする場所は教会でございます。今、数多くの教会名称をお返ししなければならなくなつたということは、次の代に信仰が伝わっていないということの表れだと

思うのでございます。人を育てることが疎かになっていたということは、生み育ての徳分を頂く女性の責任は大きいのではないかと思うのでございます。

それは今に始まつたことではなく、ずっと前からの積み重ねだと思いません。例えば、嫁姑の間では、私の親世代の方々は、その親からは厳しく仕込まれたけれども、次の世代、すなわち私たち世代には、遠慮して気を使い、十分に言えないということを聞いたことがあります。そして今、私たち世代が親の立場になり、また同じようなことを思っている人が多いのです。また、我が子に対しても、躰仕込みも甘くなつていくように感じられます。このように、段々、段々と仕込むことが弱くなつていつていいんだろうか、このまま進めば、

この先どうなつてしまふのか不安に思うのでございます。

国の教育方針の影響を受けるといふこともあるでしょう。戦後だんだんと欧米化が進む中での思想の変化などもあり、昔から受け継がれてきた日本の精神というものが希薄になつて、仕込みや躰がしにくくなるといふのは仕方ないことなのかも知れません。しかし、信仰的な考え方、信念というものは、世上の思想や風潮に左右されずに変わりなく伝えなければなりません。また忍耐強さを身に付けさせる、厳しさも忘れてはならないと思うのでございます。

これまで毎年婦人会総会に真柱様のお言葉を頂戴してまいりましたが、この数年、真柱様のお言葉を頂くことができない状況でございます。今

一度改めてこれまでの真柱様のお言葉を拜読させて頂き、よくよくかみしめさせて頂くことが大切だと思います。

歴代真柱様がずっと願い続けてくださっているのは、みちのだいとしてのつとめをしつかりつとめてほしいということ、すなわち、人を産み育てる徳分を持つ女性に、教祖が人を育てられたお姿を手本として、後に続く者を立派なようばくに育ててもらいたいということでございます。思案の台として時には元始まりの話時には原典に触れながら、女性の徳分をわかりやすく説明してくださり、親神様が女性に望まれる役目を、そのたびごとに何度も何度もお諭し下さっているのでございます。お言葉を素直に受け止めて、そのように育

てておられる方も大勢おられます。しかしその受け止めたことを自分だけに留めず、お道の婦人という婦人皆がそのように人を育てられるように、導き丹精していかなければならないという点が弱かったのだと思うのでございます。そこで、これまで頂いた真柱様のお言葉をふり返つて、味わわせて頂きたいと思えます。

二代真柱様は、「同じことをするのみが男女同権、または、雌雄松は隔てないと言うことではないのであります。男には男の筋道、女には女の道、それぞれのつとめる道をお与え頂いておるのであります。一番はつきりと申すならば、男の腹からはごどもは生まれないのであります。皆さん方はごどもを生み、ごどもを育てる上においてのまた一つの台と

おなりになるのが婦人の立場であると申し得ましよう。この点をよくご思案頂いて、縦の布教と申しますか、ごどものしつけと申しますか、その上に立派にみちのだいとしての心の成人をお進め頂きたい、我を出したり、体裁を考えずに、あくまでも生一本に神一条のごどもの仕込みというものにおつとめ頂きたい、これがみちのだいの一つのつとめであるとも申すのであります。みちのだいであるところの婦人がしつかりした信念を持つか持たぬかによつて、道は未代続くという理が途切れてゆくことが恐れられるのであります。自分の腹からごどもが生まれ、ごどもがまたごどもを産んで、縦の伝道と先日申しましたが、この理の

元は、母親の薫化、感化、保育ということをよくご承知いただきたい、道の未代続か否か、その喜びの実は母親の信念にあると私は申したいのであります。」とお仕込みくださいました。

また、前真柱様は、「婦人会と言えばみちのだい、みちのだいと言えば婦人会、みちのだいということを担当より道の婦人の使命として考えてきたのであります。与えて頂いたこどもが、立派に道の上に役立たせて頂けるような、他日、道具として働けるような信念を植え付けることに、常に限りなく心を砕いて丹精することこそ、みちのだいの台たる所以であると考えて頂きたいのであります。常にこどもに身近く接して居るのが母親であるとするならば、皆さん方の日々の信仰の上での態度が

どれだけ後継者の上に現れてくるかということ考えた時に、今一度しっかりと心の住まい方、心の修め方、身の振り方を間違いの無いように正すということを実行していただきたいとお願ひしたい。親神様のご守護の数々を純真な心に映し、伝えていただくことを皆さんに強くお願ひしたい。そうして成長することも達が進んで人だすけに勤しみ、親神様のお話を広めさせて頂く信念を固めてくれるよう心がけていただきたいと念ずる。どんなときにも神一条の信念で、ひながたをたどれる自覚を持つてほしいし、長じては陽気ぐらしを目指す立派な道のようによく育ててもらいたいと願っているのであります。できうることならば、人だすけが人生の楽しみになるように躡けて

いただきたいということを、今日皆さんに願ひしたのである。婦人会活動の根本は道の子を道の子らしく育て上げること、その骨折りを惜しみなくやるということ、婦人会には縦の伝道にも、横の布教にも、あたかも車の両輪の如く同じ比重をもって活動していただきたいのである。」とお諭しくございました。

そして、真柱様は第百回総会において、

「こへやとてながきくとハをもう
なよ心のまことしんぢつがきく」

(四号五一)

とあります。導いた人が、教祖の手足となつて働かせてもらうまでに育つよう、時に応じて言葉をかけたり、一緒に行動したり、時には黙つて見守りながら、心を込めて常日頃の世

話取りをしていくことが、女性の徳分を活かす道ではないかと思うのがあります。そして、そうしたみなさんの誠を尽くした丹精によって、育てくる人たちと力を合わせて、教えに沿って暮らすことを心がけ、自分につながる社会が、丸く治まるように働きかけていけば、その姿が糸口になって、みなさんの回りに、土地所に、互い立て合いたすけあう陽気ぐらしの輪が広がっていくだろうと思うのであります。」

「教祖が付けてくださった、たすけ一条の道は、一代や二代で終わってよいというような道ではありません。私たちが通っているこの道は、末代かけて通る道なのであります。たとえ時代は変わっても、その時代その時代の道を通るすべての人々が、一人ひとりの心の普請に励んで陽気

ぐらしの実現という一点に心を結び、親から子へ、子から孫へと、バトンの受け渡しを繰り返しながら、末代までも信仰をつないで通る、これがこの道を通るお互いの責任であります。」とお聞かせくださいました。

こうして、改めて拝してみますと、いつもいつも真柱様は、『道の台』を使命とする婦人の、人を育てることの責任の重さ、心得を懇々とお諭しくださっているのをごさいます。

教祖のひながたをたどることの一つは、教祖の人を育てるうえでのお心配り、なさり方をお手本として実行することです。皆様もご承知の通り、立教より、親神様の思召のままに、教祖は田畑、家財を施し続けられ、更にはお母屋を取り毀ちされてからの約十年間は、艱難辛苦

のどん底をお通りになられました。

そのような道中を秀司様、こかん様は、教祖と共にずっとお側で通られたのは、因縁ある魂のお方だからできたのでしょうか。そうかも知れません。しかし人間ですから、空腹や寒さも感じられたでしょう。我がものとして自由に使える心はいろんな心持ちであられたと拝察するのでございます。どんな状況の中にあつても親神様の、人間の陽気ぐらしする姿を見て共に楽しみたいとの思召からこの世と人間をお始めになられたという元の理を、そのままつづくに心に修められて、この先実現されるであろう陽気ぐらし世界を楽しみに、今はその一步を歩み出したところであり、通るべき道中だということとを会得されたのだと思うのがございます。だから食べるものも、暖を

取るものもない難渋な中でも、親神様の十全のご守護をいただいで結構に生かされていることの喜びを教祖から教えられて、親神様に凭れ、信じ切つて通られたのだと思うのであります。

これ以上無い難渋な中を通つてくださつたひながたを思うと、現在の私たちの生活の中で、こどもが道から外れる、信仰からそれてしまうということは、育てる側の日々の態度が教えに基づいていたのか、こどもを育てる上での信念を持つていたのかを反省しなければならぬと思うのでございます。これまで長い間眞柱様が婦人に諭し続けてこられたことですから、皆様はよくご承知のことだと思いましたが、あえて今日お話ししたのは、世界のあちこちで起

こる痛ましい事件、そして未だ続く新型コロナウイルスの感染という事柄が、目の前にあり、特に今、毎日報道されることを目にする度に、胸が痛み、悲しみとむなしさがこみあげ、なんとかできないものかと思いはするものの、自分では何もできないことに無力さを感じたからです。

親神様は陽気ぐらしをさせたいと思し召されて人間をお創りになり、陽気ぐらしができるようにすべてのものをご守護下さり、お与え下さっているのに、人間は自由に使える心を遣い誤つて、人を傷ついたり、命を奪つたり、いさかい、争いを繰り返しています。今お道を信仰する私たちに何ができるのかと考えた時、よろづたすけのおつとめを眞剣に勤め、親神様に祈ることだと思つただけでございます。しかしお願いしただけ

ではご守護はいただけません。その願ひを受け取つていただくためには、教えていただくことを実行することしかないと思つたのでございます。お道の今の事情も考え合わせると、私たちは親神様が婦人に望まれる役目をしつかりつとめること、それに尽きると思うのでございます。その上から今日はこれまでの眞柱様のお言葉を讀ませていただきました。

婦人会は、

「一時女、婦人会として始め掛け。これ人間が始め掛けたのやない。神が始めさしたのや。これは古い道にこういふ理がある、こういふ事があると、互い／＼研究始めたら、いかな理ある、どんな理もある」

「婦人会というは、道始めて互い／＼の諭し合ひの道治めてやれ」

との「おさしづ」によって始まったのでございます。なるほど婦人というのは話すことが好きであり、得意な方が多いんです。心の内を聴いてもらって心が楽になることがあります。人の意見を聞いて理解を深めていくことができます。婦人の成人のうちには欠かせないものだと思うのでございます。おさしづに「論し合いの道」とありますが、論し合いということばと談し合いは少し趣が違ふように思うのでございます。談し合い、練り合いというのは、数人が集まって話し合うことです。論し合いは、論すということをし合うということだと思ふのです。論すという言葉は、辞書には、目下の者に物事の道理をよく分かるように話し聞かせる。納得するように教え導く、と

あります。親神様の教えを実行し教祖のひながたを目標に通らせていただいているつもりでも、悩んだり、心得違いをしてしまったり、自分のことはなかなか気づかないものから、互いに気づいたことを論し論される中で、成人を進めてもらいたいという思召だと思うのでございます。

人を育てるうえで、まずは自分が教えを心に治めるために、積極的に教えを学び、教えに則った行動を心がけ、確固たる信念を培うことが肝心でありますから、婦人同士が互いに論し合い、談し合うことによって、心を練り、磨いて、立派な道の台となれるように、婦人会活動を進めていきたいと思ひます。私たちの使命である、道の子を道の子らしく立派なようぼくへと育てる上で、どうし

たらいいのか、また道の婦人は皆その資格を持つて真剣に取り組んでもらうにはどうしたらよいか、そういう点をしっかりと談し合つていきましよう。教えの根幹である元始まりのお話に親しみ、私たちの為すべきことの元を求めてください。そして原典に親の思いを求めると、せずにはいられない、させていたたけようという勇んだ心が変わつていくものと信じます。そしてこれまでに婦人会にお話しいただいた真柱様のお言葉を、今日は一部しか披露できませんでしたので、よくよく拝読して私たちの使命を心に刻み込み、実行へと移していきましよう。

本年十一月二十七日には第三十回女子青年大会をここ親里で開催いたします。この世治める真実の教えを

女子青年が積極的に学び、この道を通る素晴らしさ、ありがたさを心から感じ、日々によるこびの心をもってご恩報じの実行をしていただきたいのでございます。次代を担う立派な道の台となるように、日々に心を砕いて丹精をさせていただきましょ

う。
老いも若きも道の婦人同士が諭し合い、談じ合って、互いの成人を手伝って立派な道の台となれるように育つ努力をし、世界中の人々が互いに立て合い、たすけ合う陽気ぐらしの世界実現という一つの目標に向かって、それぞれが与えられた立場、役目を勇んでつとめること。そして、また教えを知らない多くの人に教えを伝え広めることが私たちのご恩報じであることを肝に銘じ、特に共に道の台として歩んでくださる婦人会

員を、一人でも多くご守護いただけるよう、今日からまた明るく勇んでおつとめくださることをお願いいたしますしてご挨拶とさせていただきます。



大亮様ご臨席のもと、本部中庭にて三年ぶりに開催されました。新型コロナウイルス感染拡大防止対策を講じながら、支部の代表者のみと縮小開催ではありましたが、久しぶりの開催に笑顔での参加となりました。旭日からは二十一名が参加致しました。



婦人会総会に行ってきました！

もったいなくも、参加人数の一員に加えていただき、参加致しました。婦人会長様、内統領様からのお言葉、一言一言は、大変心に染みました。自分の成人のなさに反省するばかりです。お誓いの言葉のように、日々頂戴するご守護への感謝の心、おちば、教祖をお慕いする心を深め、夫婦親子、家族から陽気ぐらしの生き方の手本を一人でも多くの人に、胸から胸に伝える道が世界を救うただ一つの歩みだと確信いたしました。

今日のお話を教会に帰りましたら、教えを心に、日々を教祖にお喜びいただけるように、信念を持って一人のみちのだいとして伝えさせていただきたいと思います。

三年ぶりの婦人会総会に参加させて頂き、とても有り難く感激いたしました。婦人会長様は、このコロナ禍の節において気付いたこととして、人を育てる大切さをお話になり、それには日々の努力が重要で女性の徳分を生かして、意識を持って声をかけ、しっかりと丹精することが大切であると教えて下さいました。さらに、歴代真柱様のお言葉を引用され、道の台としてのつとめをしっかりとつとめ、後に続く者を立派なよふぼくに育ててもらいたいと仰いました。

直接、婦人会長様のお話を聞かせて頂き、きめ細かい丹精ができているかという大変申し訳なく、日々の通り方を反省いたしました。まずは自分がしっかりと教えを心に治め、勇んで実行し、教祖の思いに少しでもお応えさせて頂けるよう通らせて頂きたいと思います。

六月例会案内

日時 六月五日(日) 午前十時
場所 旭日大教会
内容 教祖祭
お願いごとめ
ておどり(半下り)
母親講座
お弁当配布

六月例会役割

扨者	木村 昌子	庄司 英美
賛者	前田 理恵	山本 ひとみ
指図方	村井 明子	

女子青年案内

webブックレット『Blossom-lite-no.12』を配信しました。

新委員長挨拶、こかん様に続く会の様子が載っています。

女子青年オープンチャットか大教会ホームページからご覧下さい。



今月の表紙より

亡き母を偲び会した人に白いカーネーションを渡したことが由来の「母の日」のカーネーション。赤色は「母への愛情」、ピンク色は「感謝、上品」、紫は「気品、誇り」といった意味を持っています。青いカーネーションには「永遠の幸福」なんて花言葉も。普段は言えない思いや言葉も花と一緒に託してみませんか？

こかん様に続く会報告

去る、5月1日にこかん様に続く会を開催させていただきました。雨模様でのスタートでしたが本部参拝とひのきしんの後に、雨は上がり記念写真を撮ることができました。詳細は来月号に載せさせていただきます。女子青年の参加者は8名でした。



天の言葉や

「何処の国にも彼処の国にもあつた
ものやない。神が入り込んで教祖
教えたもの。その教祖の言葉は天
の言葉や。」

(おさしづ 明治34年5月25日)

発
行
所

天理市田井庄町二二八
天理教婦人会旭日支部

発
行
者

岡
本
道
子

発
行
日

令
和
四
年
五
月
五
日